長岡京跡右京第950次
発掘調査報告

2009

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京跡右京第950次
発掘調査報告

２００９

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

調査地全景（北から）

（1）近世勝龍寺城本丸の堀（北から）

（2）神足遺跡の環濠（南から）

序　　文

長岡京市では「住みつづけたい　みどりと歴史のまち　長岡京」をめざして街づくりに取り組んでおります。みどりと歴史、街との調和を保ちながら、より住みよい環境を整えていくために、発掘調査によってより詳細な歴史資料を明らかにすることが私どもに課せられた使命であります。

ここに報告する調査は、平成15年度から実施されている市道第0207号線のバリアフリー化の一環としておこなわれている道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の平成20年度に実施した成果です。

当地域は長岡京跡をはじめ、江戸時代勝龍寺城（神足館）、神足遺跡などが重複して所在する市内でも有数の遺跡密集地であります。今回の調査でも、細長い調査区にもかかわらず、神足館本丸の堀や弥生時代・神足遺跡の環濠など、遺跡の復原に欠かせない重要な成果を多く確認できました。

これらの成果をさらに周辺での資料と合わせて総合的に研究し、市民の皆さんに公開していくことで、これからの街づくりに貢献していきたいと願っております。

最後になりましたが、現地調査から整理作業に至るまで、さまざまなご指導・ご協力いただきました関係各機関、関係者の皆様に厚くお礼申し上げるとともに、今後なお一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成21年３月

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
理事長　芦田富男

凡　　例

1．本書は、平成20年度に長岡京市東神足二丁目地内で実施した市道0207号線（愛称ガラシャ通り）の道路改良工事にかかわる埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。

2．調査は、長岡京市土木課の委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター調査係主査原秀樹が担当した。

3．長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良国立文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。

4．長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第４号の復原に従った。

5．本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）によった。

6．本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第２集（1985年）に従って略記した。

7．本書において使用している遺構番号は長岡京跡に関する調査の場合、調査次数＋番号であるが、報告によっては煩雑を避けるため調査次数を省略している。「ＳＤ01」などの場合は、調査次数を冠した「ＳＤ○○○01」が正式な番号である。

8．本書で使用している国土座標値は、旧座標系の第Ⅵ系によっている。

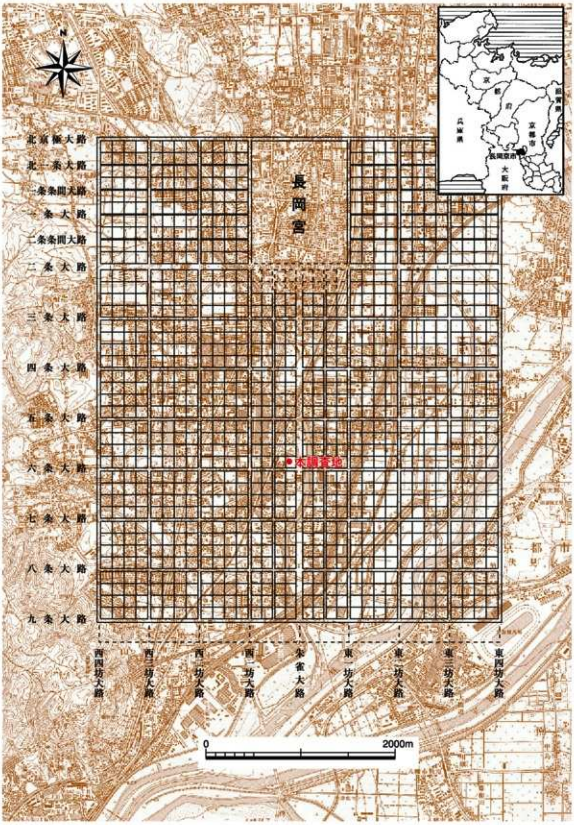
9．本書で用いた土層の色調は、『新版標準土色帖』（2008年版）によった。

10．遺物写真は、（財）京都市埋蔵文化財調査研究所に撮影を依頼した。

11．図面作成および石器の検討は、（株）文化財サービスに依頼した。

12．本書の編集は原が担当し、文末に執筆者名を記した。

※表紙カット　２トレンチ暗褐色土出土の石小刀



第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）

本 文 目 次

序　　文 …… i
凡　　例 …… ii
1　はじめに …… 1
2　調査経過 …… 2
3　検出遺構 …… 7
4　出土遺物 …… 15
5　ま と め …… 27

図　版　目　次

巻頭図版１　調査地全景（北から）
２　（１）近世勝龍寺城本丸の堀（北から）
（２）神足遺跡の環濠（南から）

図版１　１トレンチ全景（南から）
図版２　２トレンチ全景（北から）
図版３　２トレンチ拡張後（北から）
図版４　３トレンチ全景（南から）
図版５　３トレンチの堀ＳＤ14（南から）
図版６　（１）本丸の堀（北西から）
（２）本丸の堀断面（西から）
図版７　４トレンチ全景（北から）
図版８　５トレンチ全景（南から）
図版９　（１）環濠ＳＤ03・ＳＤ04（南から）
（２）環濠の断面（西から）
図版10　（１）６トレンチ全景（北から）
（２）７トレンチ全景（南から）
（３）８トレンチ全景（南から）
図版11　石器・石製品
図版12　石器・石製品
図版13　弥生土器・須恵器

挿　図　目　次

第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）…… iii
第２図　発掘調査地位置図（1/5000）…… 1
第３図　調査前の状況（北から）…… 2
第４図　調査前の状況（南から）…… 2
第５図　トレンチ配置図（1/800）…… 2
第６図　１トレンチ平面図・断面図（1/100・1/50）…… 3
第７図　２・３トレンチ平面図・断面図（1/100・1/50）…… 5
第８図　４トレンチ平面図・断面図（1/100・1/50）…… 9
第９図　５トレンチ平面図・断面図（1/100・1/50）…… 11
第10図　６・７・８トレンチ平面図・断面図（1/100・1/50）…… 13
第11図　弥生土器実測図－１（1/4）…… 16
第12図　弥生土器実測図－２（1/4）…… 17
第13図　弥生土器実測図－３（1/4）…… 18
第14図　弥生土器実測図－４（1/4）…… 19
第15図　その他の遺物実測図－１（1/4）…… 20
第16図　その他の遺物実測図－２（1/4）…… 21
第17図　石器・石製品実測図－１（1/2）…… 22
第18図　石器・石製品実測図－２（1/2）…… 24
第19図　石器・石製品実測図－３（1/2）…… 25
第20図　石器・石製品実測図－４（1/2）…… 26
第21図　弥生時代の遺構配置図（1/2000）…… 28
第22図　近世勝龍寺城の本丸周辺遺構配置図（1/2000）…… 29

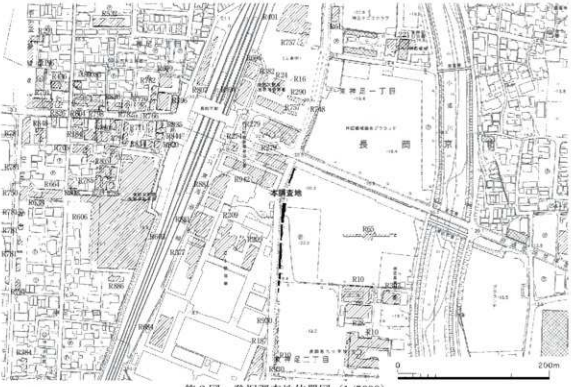
付　表　目　次

付表－１　石器計測表 …… 27
付表－２　報告書抄録 …… 30

1　はじめに

本報告は、平成20年度に実施した長岡京市東神足二丁目地内の市道0207号線（愛称名ガラシャ通り）の道路改良工事に伴う右京第950次調査の概要報告である。調査地は、ＪＲ長岡京駅東口の交差点から南東へ200mの市立長岡第九小学校までの道路沿いに位置しており、昨年度に実施した右京第930次[(10)]調査の継続調査である。本地点は、小畑川右岸の低位段丘Ⅰに立地しており、地形は北から南へ緩やかに傾斜する。付近の標高は、調査区の北端で20.1m、南端では19.5mである。ＪＲ長岡京駅付近は、交通の利便性と立地の良さから戦前から工場が進出しており、工場移転後も広大な敷地が残されている。

周辺の調査は、昭和53年（1978）の第九小学校建設に伴う右京第10次・第28次[(2)]調査を皮切りに、隣接する工場内で実施された右京第209次[(3)]、第881次[(4)]、第942次[(5)]調査、ＪＲ東口の駅前整備に伴う右京第279次[(6)]、第494次[(7)]、新社屋建設に伴う右京第757次[(8)]調査のほか、東神足一丁目地内の道路改良工事に伴う右京第748次[(9)]調査など数多くの発掘調査が行なわれている。これらの調査で特筆される成果には、弥生時代中期の神足遺跡が竪穴住居などが集中する居住域の周りに濠を巡らせて、外側に方形周溝墓や土壙墓などの墓域が広がる集落の構造が明らかにされたことと、江戸時代初期に永井直清によって造営された勝龍寺城跡の遺構が、伝世された絵図と対比しながら具体的な配置が判明してきたことなどが上げられる。このほか、長岡京の条坊側溝も確認されており、各時代の遺跡が重複する神足遺跡の実態が明らかにされてきている。



第２図　発掘調査地位置図（1/5000）

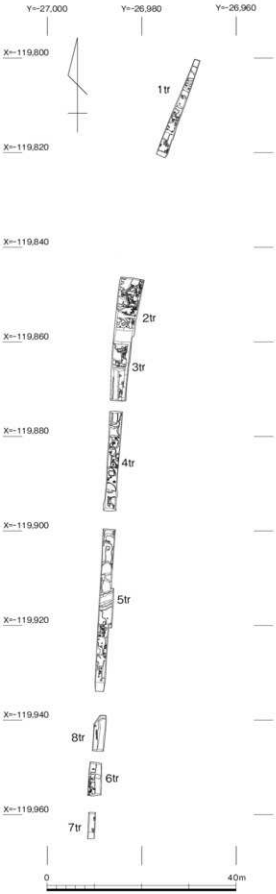
2　調査経過

第３図　調査前の状況（北から）

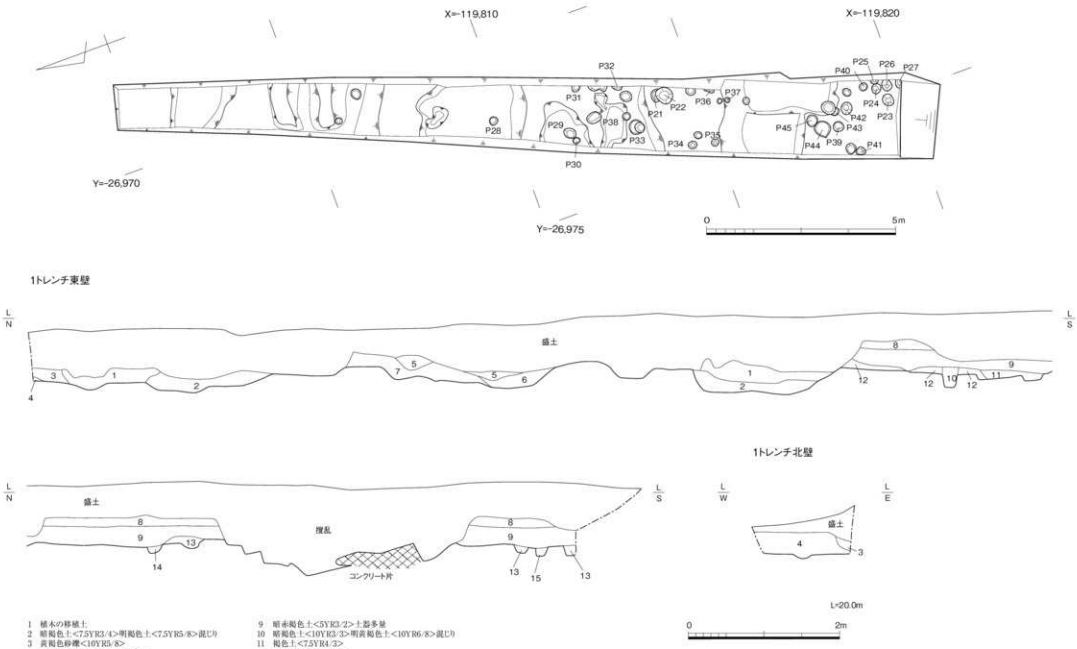
第４図　調査前の状況（南から）

調査対象地は、ＪＲ長岡京駅前の交差点から長岡第九小学校までの道路沿いにあり、北と南では約150m離れている。調査前は、道路東側に歩道があり、フェンスの向かいに整然と植木が植えられていた。調査範囲は、歩道側のフェンスと駐車場側の仮設フェンスの間であり、移植された植木跡は防草シートで覆われていた。トレンチの設定は、水道管や下水道施設、電柱の他に、通路を確保する必要から限られた範囲となった。

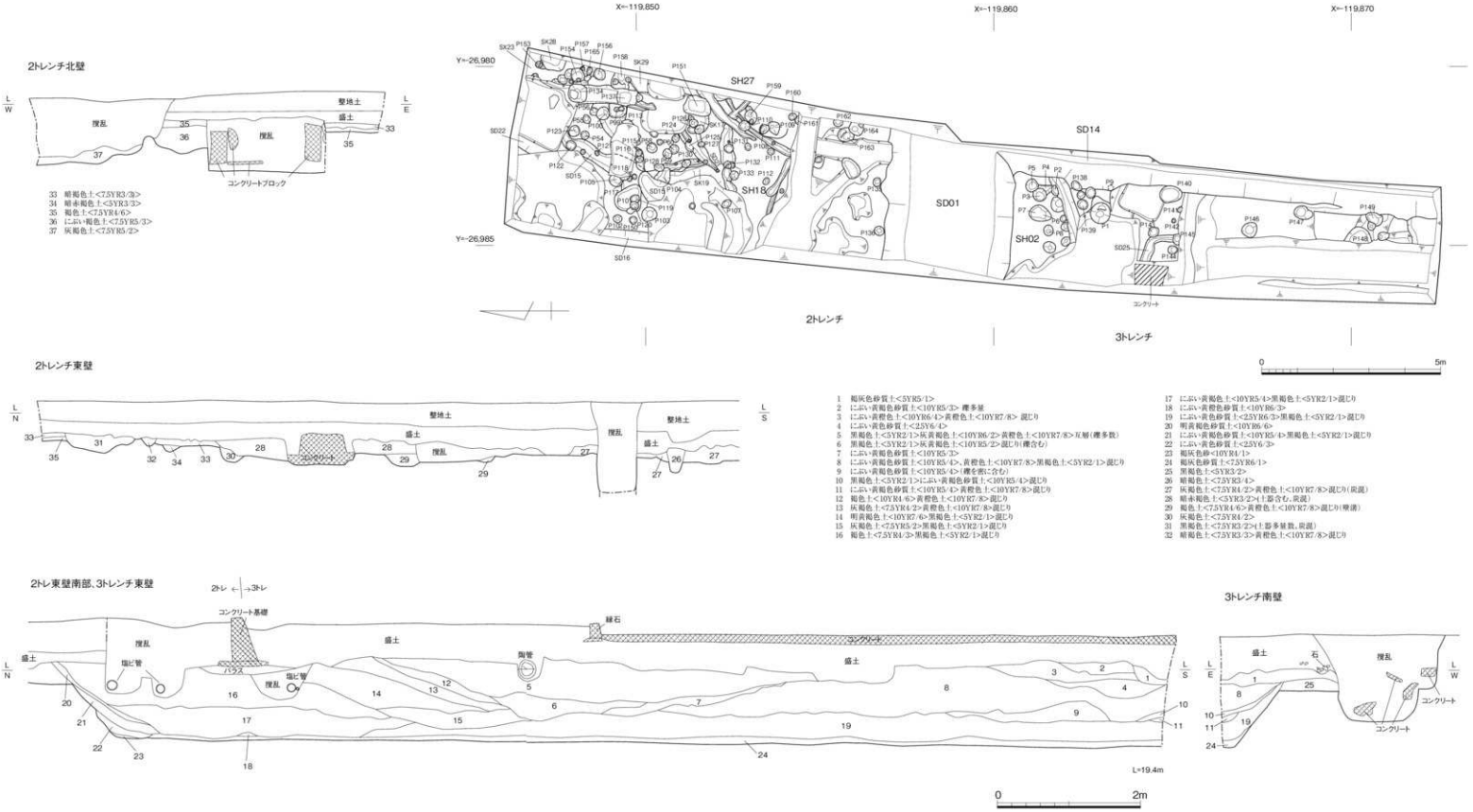
調査トレンチは計８ケ所設定した（第５図）。トレンチによっては、土置き場の都合から、埋め戻し後に反転を行なった。調査の進行に合わせて可能な限り道構を追求するため拡張を行なったが、全体に撹乱が多い状況は予想外であった。このうち、７トレンチは昨年度の調査で進入路のため調査できなかったところである。



第５図　トレンチ配置図（1/800）



第6図　1トレンチ平面図・断面図（1/100・1/50）



33 暗褐色土<7.5YR3/3>
34 暗赤褐色土<5YR3/3>
35 褐色土<7.5YR4/6>
36 にぶい褐色土<7.5YR5/3>
37 灰褐色土<7.5YR5/2>

1 褐灰色砂質土<5YR5/1>
2 にぶい黄褐色砂質土<10YR5/3> 瓦多量
3 にぶい黄橙色土<10YR6/4>黄橙色土<10YR7/8> 混じり
4 にぶい黄色砂質土<2.5Y6/4>
5 黒褐色土<5YR2/1>灰黄褐色土<10YR6/2>黄橙色土<10YR7/8>互層(瓦多数)
6 黒褐色土<5YR2/1>灰黄褐色土<10YR5/2>混じり(瓦含む)
7 にぶい黄褐色砂質土<10YR5/3>
8 にぶい黄褐色砂質土<10YR5/4>、黄橙色土<10YR7/8>黒褐色土<5YR2/1>混じり
9 にぶい黄褐色砂質土<10YR5/4>(瓦を密に含む)
10 黒褐色土<5YR2/1>にぶい黄褐色砂質土<10YR5/4>混じり
11 にぶい黄褐色砂質土<10YR5/4>黄橙色土<10YR7/8>混じり
12 褐色土<10YR4/6>黄橙色土<10YR7/8>混じり
13 灰褐色土<7.5YR4/2>黄橙色土<10YR7/8>混じり
14 明黄褐色土<10YR7/6>黒褐色土<5YR2/1>混じり
15 灰褐色土<7.5YR5/2>黒褐色土<5YR2/1>混じり
16 褐色土<7.5YR4/3>黒褐色土<5YR2/1>混じり
17 にぶい黄褐色土<10YR5/4>黒褐色土<5YR2/1>混じり
18 にぶい黄橙色砂質土<10YR6/3>
19 にぶい黄色砂質土<2.5YR6/3>黒褐色土<5YR2/1>混じり
20 明黄褐色砂質土<10YR6/6>
21 にぶい黄褐色砂質土<10YR5/4>黒褐色土<5YR2/1>混じり
22 にぶい黄色砂質土<2.5Y6/3>
23 褐灰色砂<10YR4/1>
24 褐灰色砂質土<7.5YR6/1>
25 黒褐色土<5YR3/2>
26 暗褐色土<7.5YR3/4>
27 灰褐色土<7.5YR4/2>黄橙色土<10YR7/8>混じり(炭混)
28 暗赤褐色土<5YR3/2>(土器含む、炭混)
29 褐色土<7.5YR4/6>黄橙色土<10YR7/8>混じり(瓦溝)
30 灰褐色土<7.5YR4/2>
31 黒褐色土<7.5YR3/2>(土器多量数、炭混)
32 暗褐色土<7.5YR3/3>黄橙色土<10YR7/8>混じり

第7図　2・3トレンチ平面図・断面図（1/100・1/50）

3　検出遺構

1トレンチ（第6図・図版1）　全長22m、幅1～2m。トレンチ北端では、盛土された歩道との間に段差が生じている。盛土以下は、移植された植木の掘形とコンクリート塊が残る大きな撹乱坑がある。周辺で近世の堆積層と認識される第8層がトレンチ南半部まで残存するが、北半部では削平されており残らない。遺構については、直径0.2～0.4mの柱穴を中心に確認されたが他にも弥生土器を多量に含む包含層があり、狭い調査範囲と撹乱で削平されたことから遺構の輪郭がつかめないだけと思われる。柱穴から、弥生土器の小片が出土している。

2トレンチ（第7図）　溝ＳＤ01を二分してネットフェンスとコンクリート擁壁が北と南を区画しており、当初は北を2トレンチ、南を3トレンチとしたが、遺構を追求する過程で擁壁を撤去したため一枚のトレンチとなった（図版2）。また、2トレンチでは調査終了後に東側を拡張した（図版3）。ここでは、遺構の性格から溝ＳＤ01以北を2トレンチとする。現代の排水溝や工場跡のコンクリート、移植された植木の掘形などの撹乱を受けていないところが島状の高まりで残る。

弥生時代の遺構

柱穴ピットは直径0.2～0.4mあり、60個余りある。連なるものが多く、単独のものも近接して密集する。弥生土器の小片が出土した。弧を描く溝は竪穴住居の壁溝に想定される。ＳＨ18とＳＨ27は、複数の溝や切り合いがあり建て替えが行なわれたようである。主柱穴については不明。住居跡の中央に設けられる灰をとどめた炉跡についても確認できなかった。壁溝は地山面で確認されており、上層で土器を含む包含層を確認した段階では明確な輪郭がつかめなかった。黒色系の埋土から出土したサヌカイト製の石小刀2点についても、おそらく遺構内であったと考えている。

その他の遺構

長辺2m、短辺0.5mの長方形掘形の両端が柱穴状に一段低くなっている。内部に石などはないが、両者の寸法は心々で1.5m。これに関連して、同じ方位上にやや大きな隅円方形の柱穴がある。この間の寸法は心々で2mあり、底は素掘りのままである。遺物は、弥生土器の小片が出土しているが、当地では新しい遺構にも弥生土器が含まれる例が多く、遺構の形態や方位が後述する溝ＳＤ01と揃う点などから近世の遺構である可能性が高い。長方形の掘形内に柱穴が2個1対あるものとしては、右京第942次調査のＳＢ15がある。

3トレンチ（第7図）　当初は、ネットフェンスから南へ約3mの長さで掘削したが、溝ＳＤ01の北肩が2トレンチ、南肩が3トレンチで検出されたことからフェンスとコンクリート擁壁を撤去することになった。その後、他のトレンチの調査状況が予想以上に撹乱で壊されていたことから、最後に出入口部分の遺構の状況を確認するために拡張を行なった（図版4）。また、調査中に溝ＳＤ01が南へ折れて延びることが判明したため、最終段階で西側の撹乱を埋めて東側の溝ＳＤ14を確認することになった（図版5）。このほか弥生時代の竪穴住居とみられる壁溝や柱穴

ピットを確認している。本地点は、西半分は工場跡の撹乱が深く、北と東は溝が巡ることから残された遺構は島状の高まりとなっている。

江戸時代の遺構

今回検出した直角に折れる溝は、江戸時代初期に永井直清が造営した神足館の本丸を囲う堀に当たる。

溝ＳＤ01　東西方向の溝で、幅約3.5m。深さ約0.8m。溝の断面は逆台形を呈する。底面には砂質土が堆積しており、北肩にも流れ込むように砂質土が堆積する。底付近から若干の瓦片が出土している。

溝ＳＤ14　当初は溝肩部分がわずかに下がる程度であり、明確に落ち込む状況ではなかった。溝の拡張は、可能な限り掘り進めて底面が平坦であるところまでは確認できたが、もう一方の肩部については調査区域外のため不明。おそらく断面形は、溝ＳＤ01と同じく逆台形であろう。本トレンチでは、溝ＳＤ01から南へ折れる長さ12m分を検出した（図版６）。東壁の堆積層は、溝が折れた付近が水平堆積から南へ下がる斜め堆積になっており、この断面を見る限り溝は北側から埋められたようである。

弥生時代の遺構

竪穴住居ＳＨ02　弧状に延びる溝が１条ある。幅0.3m。両端は溝ＳＤ14と撹乱坑で途切れている。

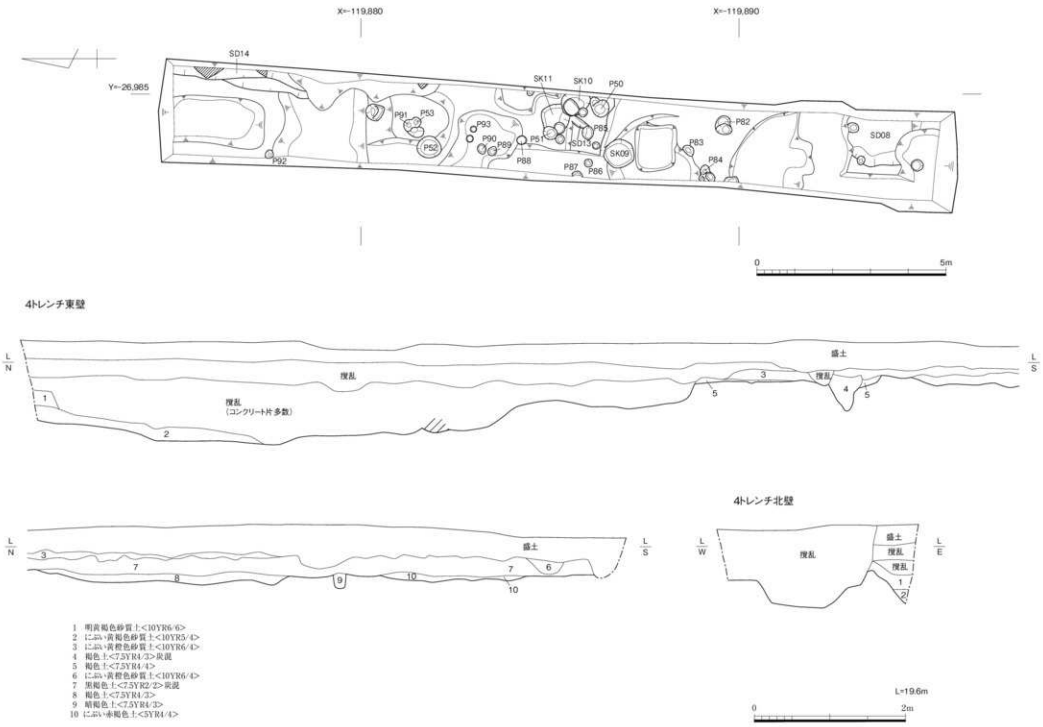
溝ＳＤ25　Ｌ字状に曲がる溝。幅0.2m前後。

柱穴ピット　直径0.2～0.5mの柱穴が20個余りある。このうち、Ｐ1の埋土中には石器片が多く含まれていた。

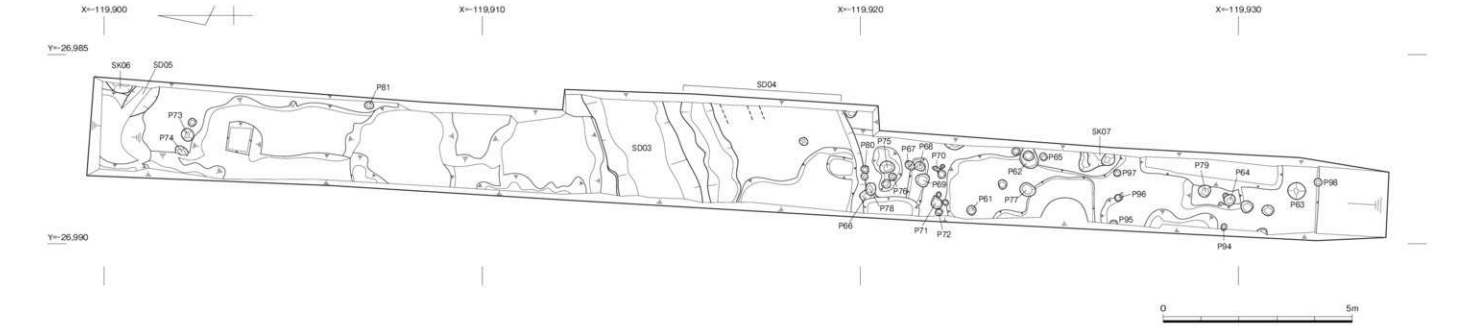
４トレンチ（第８図・図版７）　全長21m、幅2.5m。調査区の西壁側全面と東壁の北端にコンクリート塊を残す撹乱があり、その間に植木の移植跡が点在する。遺構は他のトレンチと同じく島状の高まりに柱穴や土坑などが残る。このうち、溝ＳＤ14については３トレンチから南へ延びる江戸時代の溝の延長部分に当たる。南の端は撹乱により不明。各柱穴や土坑から弥生土器が出土している。

５トレンチ（第９図・図版８・９）　全長35mのトレンチは、東側で溝ＳＤ03とＳＤ04の拡張を行なった。本地点は、拡張部分の北側でコンクリート片を含む撹乱と植木の移植跡でかなり壊されており、わずかな柱穴と深い遺構が辛うじて残った程度である。拡張部分の南側は、撹乱があるものの柱穴が30個余り検出された。溝ＳＤ03とＳＤ04については、周辺で近世の堆積層として認識される黄色系の砂質土を除去した段階で多量の弥生土器が出土した。この中には、比較的大きな破片も含まれている。両溝間で幅約７ｍの溝内から出土した遺物は、整理コンテナに20箱分である。なお、両溝については弥生時代の竪穴住居などが集中する居住域の南西部分に位置しており、溝を境に外側には方形周溝墓や土壙墓が広がることから、神足遺跡の弥生集落を囲む壕に想定される。

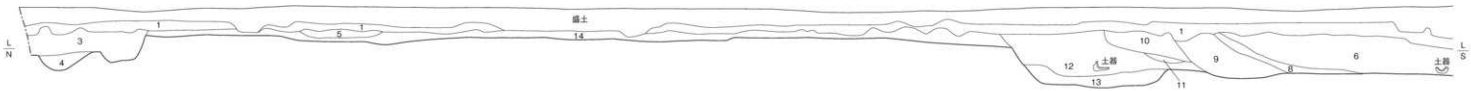
溝ＳＤ03　北東から南西方向に延びており、幅２ｍ、深さ0.7m。埋土は２層に分かれるが、遺

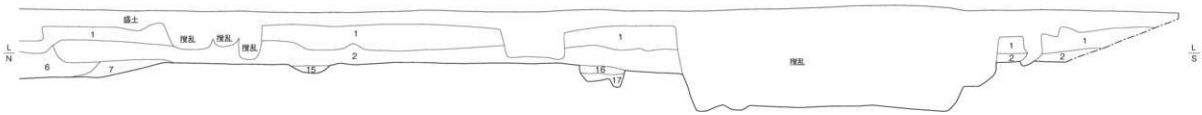


第８図　４トレンチ平面図・断面図（1/100・1/50）



5トレンチ東壁





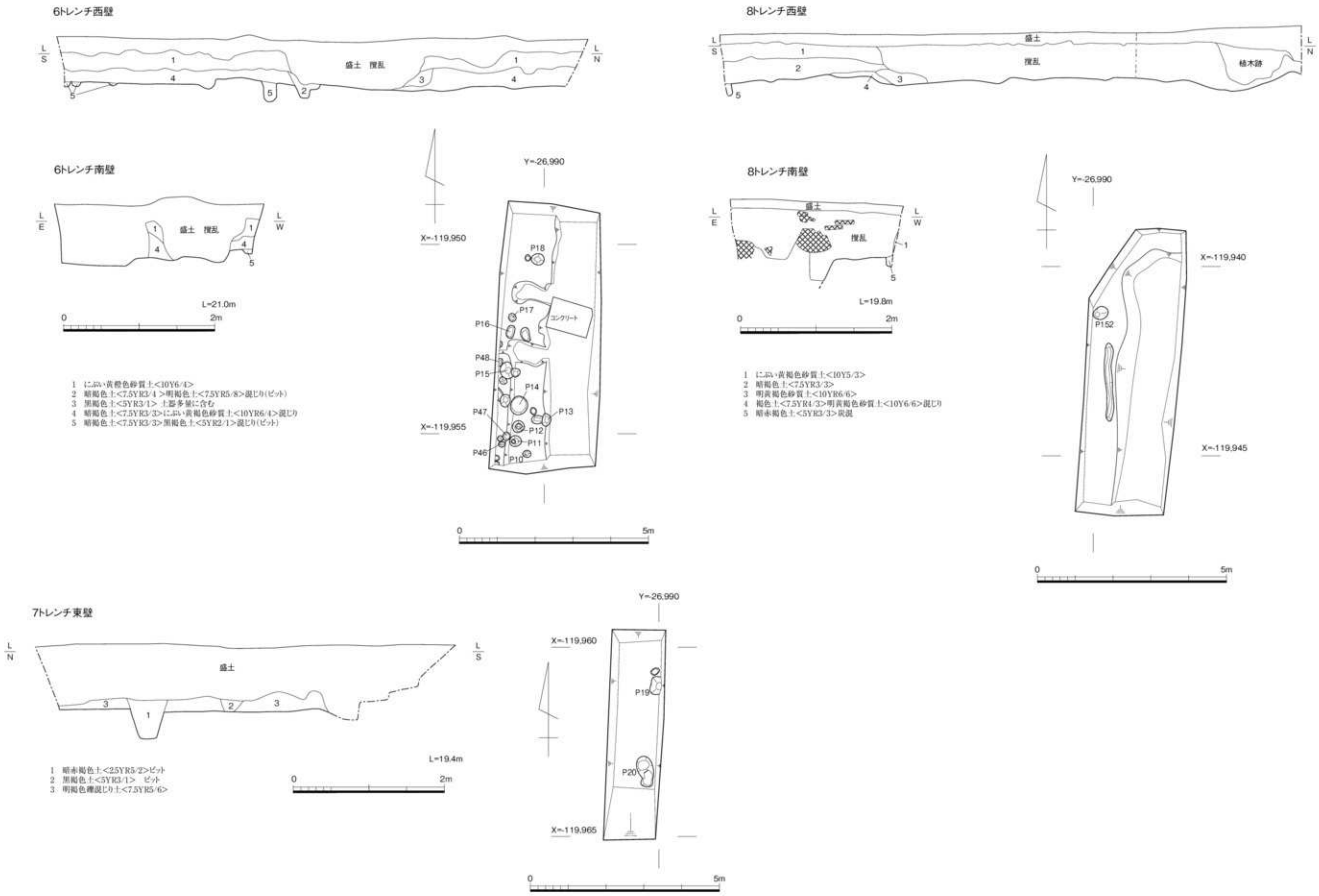
L=19.2m

0 2m

1 にぶい黄橙色砂質土<10YR6/4>
2 明褐色土<7.5YR3/3>
3 明褐色土<7.5YR3/3>土器多量に含む
4 灰黄褐色土<10YR4/2>
5 明赤褐色土<5YR3/3>
6 黒褐色土<7.5YR3/2>遺物多量に含む
7 にぶい赤褐色土<5YR4/4>
8 にぶい黄橙色土<10YR6/4>明黄褐色土<10YR6/5> 混じり
9 明赤褐色土<5YR3/4>
10 灰黄褐色土<10YR4/2>
11 黄橙色土<10YR7/8>
12 褐色土<7.5YR4/4>土器多量に含む
13 にぶい黄褐色土<10YR5/4>明褐色土<7.5YR5/8>混じり
14 明褐色土<7.5YR5/6>
15 にぶい黄褐色土<10YR5/3>
16 にぶい赤褐色土<5YR4/3>
17 明黄褐色粘混じり土<10YR6/8>

5トレンチ北壁

第9図　5トレンチ平面図・断面図（1/100・1/50）



第10図　6・7・8トレンチ平面図・断面図（1/100・1/50）

物は上位の層に集中する。

溝ＳＤ04　溝の方位は溝ＳＤ03と同じであるが、西側を撹乱されている。溝幅は最大4.5mであるが、地山面には東壁断面の第９層が別の溝として一段深くなっており、土層でも切り合い関係が認められる。この他は明瞭でないが、溝ＳＤ03も含めて複数の溝が存在したことがわかる。なお、調査中に長岡第九小学校６年生の体験発掘が行なわれ、実際に本溝の土器を掘り出す作業を体験してもらった。

６トレンチ（第10図・図版10）　全長７m。トレンチの東半分は、コンクリート基礎が残る大きな撹乱坑があり、西半分も重機の爪痕が残る撹乱であったが、深めの柱穴ピットを確認することができた。

７トレンチ（第10図・図版10）　昨年度は進入路に当たり調査できなかったところである。かなり削平されているが、柱穴ピットから弥生土器が出土した。

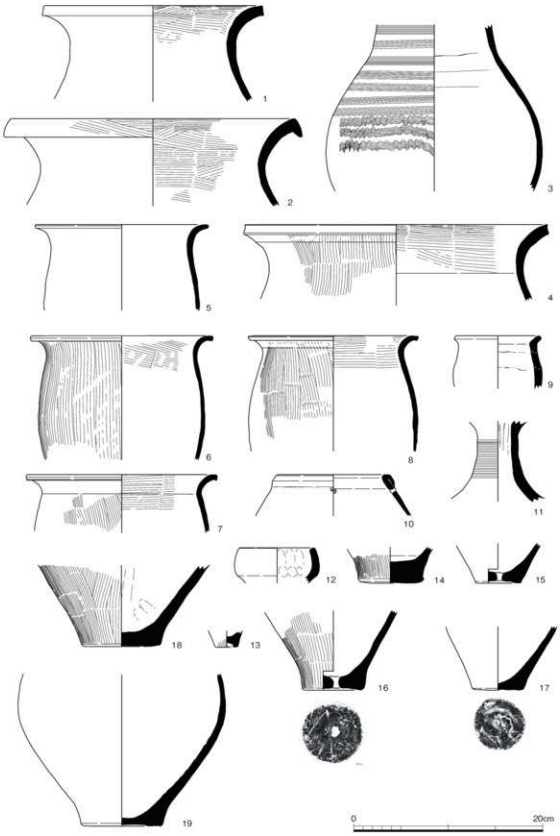
８トレンチ（第10図・図版10）　出入口部分のコンクリートを撤去して調査したが、他の調査区と同じくコンクリート塊が残る撹乱で壊されていた。わずかに小さな柱穴ピットと溝を確認している。

４　出土遺物

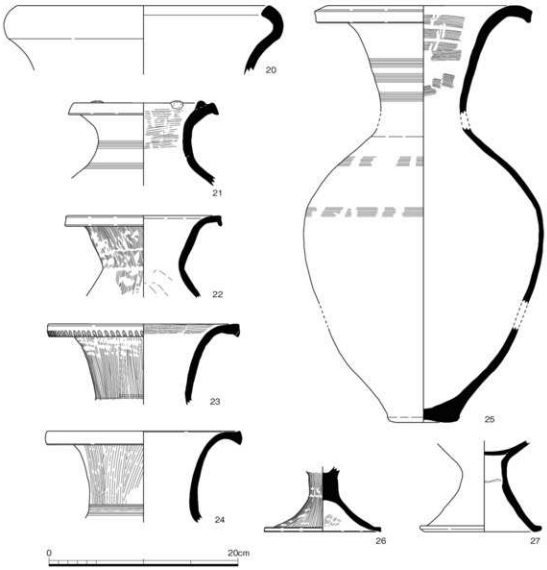
今回の調査で出土した遺物は、整理コンテナ35箱分である。大半は溝ＳＤ03とＳＤ04から出土した弥生土器と石製品であり、コンテナ20箱分ある。他にも飛鳥時代の須恵器、長岡京期の土馬、平安時代の土器や江戸時代の土製品、瓦片などが出土しているが数は極めて少ない。

溝ＳＤ03出土遺物（第11図）　壺（１～３・12）、甕（４～９）、無頸壺（10）、高杯（11）、底部（13～19）がある。１は、口縁部内面をハケメ調整するが、外面は丁寧にナデ仕上げしており装飾はみられない。２は、内面と口縁部端面に粗いハケメを施す。３は、頸部から体部上半に６条の櫛描直線文を、体部下半にやや曲がった５～６条の櫛描波状文を３帯巡らせている。12は、細頸壺。磨滅しており、調整不明。４～９は、口縁部内面と体部外面をハケメ調整する。口縁部は狭い端面を有する。９は、小型品。10は、１ケ所のみ穿孔が残る。11は、中空の柱状部に櫛描直線文を施す。底部には、ミニチュアと考えられるもの（13）、底部中央を穿孔するもの（15・16）があり、16と17は底部に木の葉の圧痕が付く。外面は、磨滅したものを除いてハケメ調整。これらの遺物は、おおむね弥生時代中期前半（Ⅱ様式からⅢ様式）に比定される。

溝ＳＤ04出土遺物（第12～14図）　細頸壺（20）、広口の壺（21）、広口の長頸壺（22～25）、高杯（26）、台付鉢（27）、有段口縁の大型壺（28・29）と、甕（30～34）、底部片（35～47）がある。20は、袋状の口縁部。21は、口縁部に２個１対のコブ状突起を付けており、端面は磨滅しているが加飾した痕跡が残る。頸部の櫛描直線文は２帯残る。22～25は、口縁部端面を拡張しており、23は口縁部下端に刻み目を巡らせる。24は、頸部に櫛描直線文を施している。25は、頸部と体部に１単位７条の櫛描直線文を施す。かなり磨滅するが、口縁部端面にも櫛描波状文を施している。26は、中実の柱状部。外面をハケメ調整する。27は、杯部を円盤充填する。26と27は、磨滅して

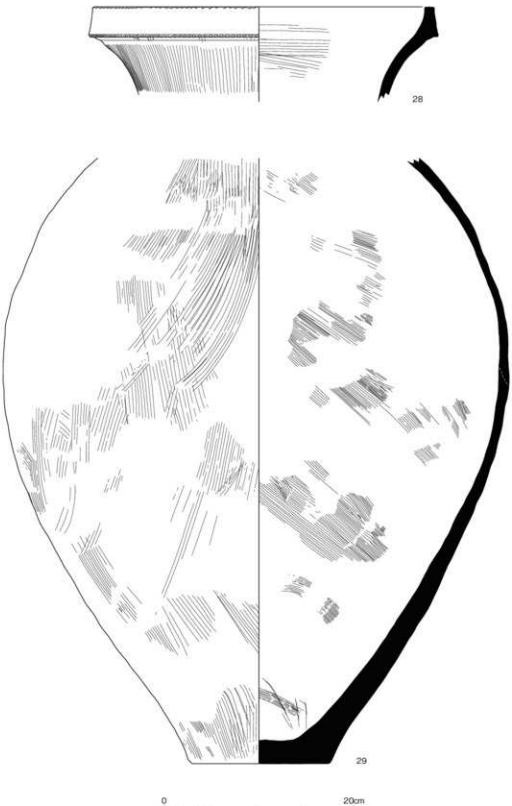


第11図　弥生土器実測図－１（1/4）

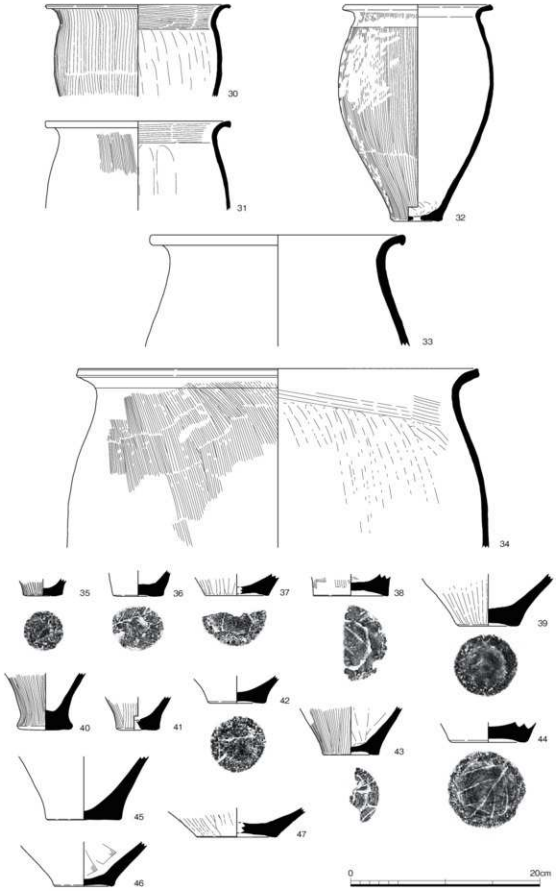


第12図　弥生土器実測図－2（1/4）

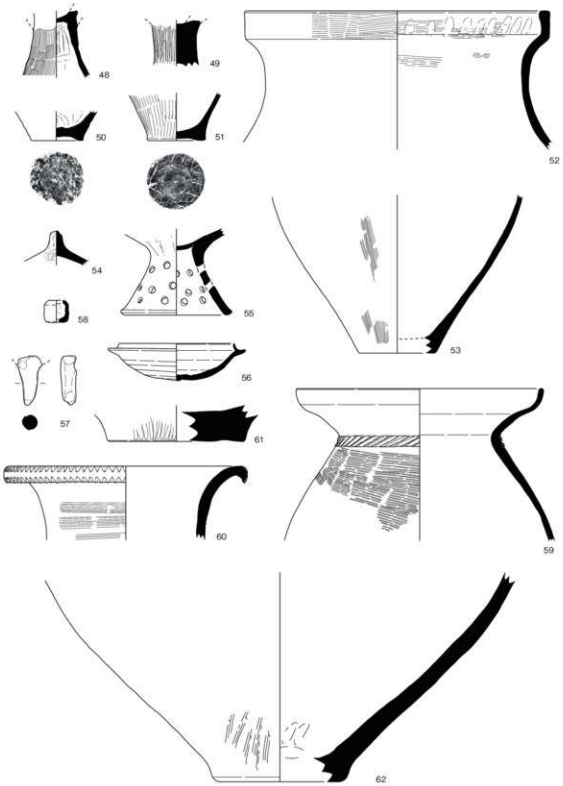
おり調整不明。28は、短く立ち上がる口縁部の上下端に刻み目を巡らせる。29は、内外面をハケメ調整する。この2点は、胎土と色調が類似しており同一個体とみられるが、頸部突帯部分の文様については不明である。30～34は、短く外反する甕の口縁部。内外面をハケメ調整する。32は、底部中央を穿孔する。底部片は、図化できるものが多いことから、いわゆる木の葉の圧痕が比較的良く残るものを中心に掲載した。圧痕の中には、全面に残るもの（35・36）と、底部中央に圧痕は残るが周縁にないもの（37・38・42・44）がある。中でも37と38は、底部の周縁に粘土を貼付けた状況が破断面からよくわかり、この部分の木の葉圧痕が見えなくなっている。42・44についても同様の成形方法であったと考えられる。39は、周縁に圧痕は残るが、上げ底となる底部中央はナデ調整しており圧痕は残らない。43は、段が付く底部の内と外の圧痕が別物のようである。41は、底部の内と外から別々に穿孔しているが貫通はしていない。これらの遺物は、おおむね弥生時代中期前半（Ⅱ様式からⅢ様式）に比定される。



第13図　弥生土器実測図－３（1/4）

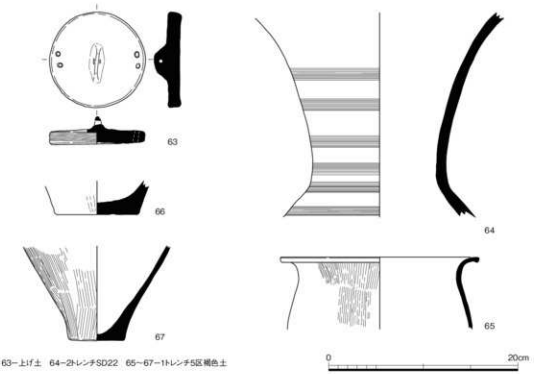


第14図　弥生土器実測図－４（1/4）



4トレンチ
　60－SD08　61－5区　62－P49
5トレンチ
　48－51－SD05　52－5区褐色土　53－5区黒褐色土
　54－SD04　55－P98　56－P73　58－SD03
6トレンチ
　57－精査
7トレンチ
　59－P19

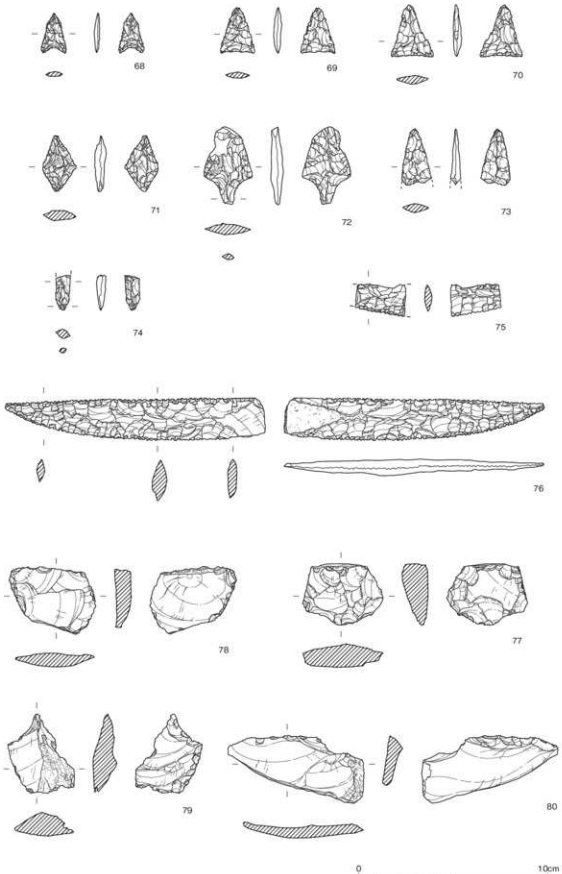
第15図　その他の遺物実測図－１（1/4）



第16図　その他の遺物実測図－２（1/4）

その他の遺物－１（第15図）　高杯（48・49）、木の葉の圧痕が残る底部片（50・51）は、５トレンチの溝ＳＤ05から出土した。48は、外面ハケメ調整。49は、柱状部は中実で、外面をヘラミガキ調整する。50は、上げ底ふうの底部中央に圧痕が付くが、底部の周縁に圧痕は残らない。51は、底部の周縁に圧痕は付くが、中央部はナデ調整され圧痕は残らない。52は、有段口縁の壺。53は、壺底部。52と53は、内外面ハケメ調整。54は、つまみの付く蓋。55は、脚台部に多数の透かし孔を穿っており、杯部は円盤充填を行なう。台付鉢か。５トレンチのＰ98出土。56は、須恵器杯身。７世紀前葉に比定される。当該期の遺物は極めて少ない。５トレンチのＰ73出土。57は、土馬の足。６トレンチ出土。58は、いわゆる江戸時代のつぼつぼであろう。５トレンチの溝ＳＤ03上面出土。59は、受口状口縁の近江系甕。頸部の突帯に刻みを入れる。体部外面は細かいタタキ目を残す。口縁部に装飾はみられない。７トレンチのＰ19出土。60は、広口の長頸壺。口縁部端面の上と下に刻み目を入れる。頸部は櫛描直線文を施す。61は、壺底部。底部の大きさから、溝ＳＤ04出土の壺（29）に匹敵する。62は、外面ヘラミガキ調整の壺。４トレンチのＰ49出土。

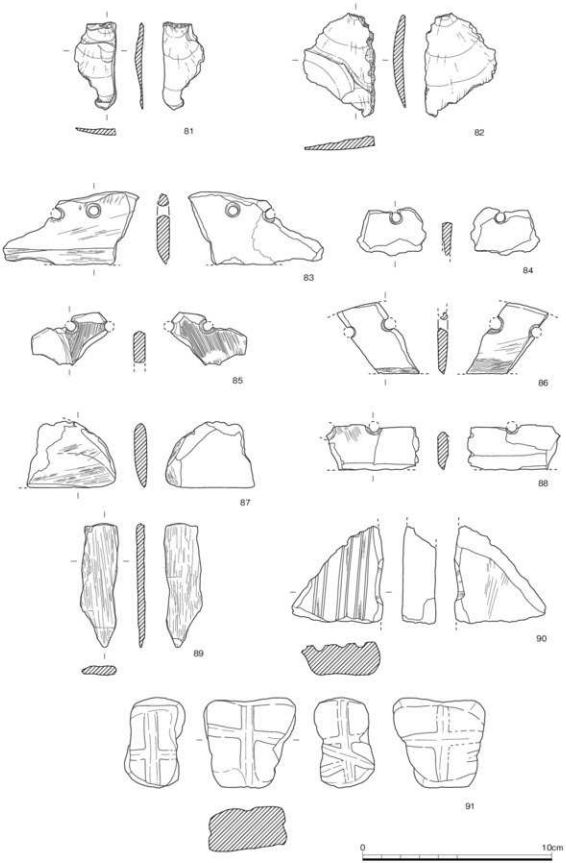
その他の遺物－２（第16図）　蓋（63）、広口の長頸壺（64）、甕（65）、底部（66・67）がある。63は、直径10.1cm、高さ３cm。厚みのある平らな円盤に扁平なつまみが付く。つまみの中央に１個所、口縁部に２個１対の円孔を２ケ所に穿っている。磨滅しているが、口縁部の側面に櫛描直線文を施す。この他に、溝ＳＤ04から口縁部に円孔を穿った蓋小片が出土している。外面には口縁部の縁に簾状文を巡らせ、その内側を櫛描文で装飾する。64は、広口の長頸壺。頸部から体部に６帯の櫛描直線文を施す。65は、口縁部内面を横方向に、外面を縦方向にハケメ調整する。66・67は、ハケメ調整の底部。　（原　秀樹）



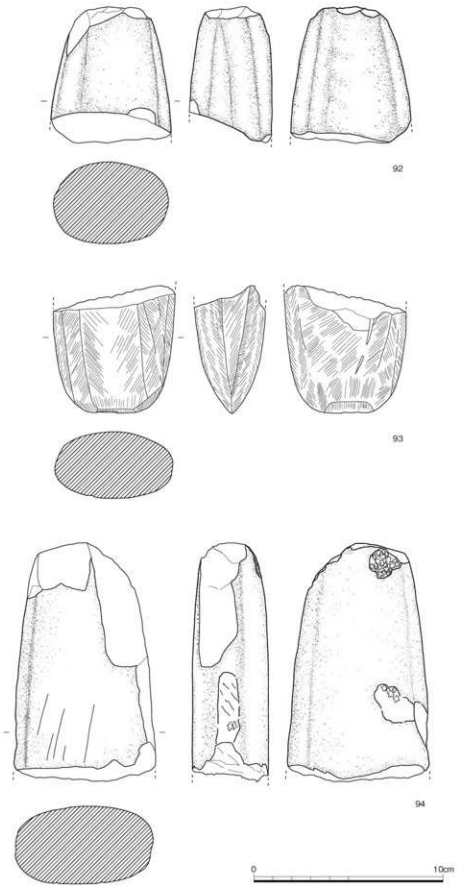
第17図　石器・石製品実測図－1（1/2）

石器・石製品（第17～20図）　ここでは30点を図示した。個々の出土遺構や石材、重量などの情報は石器計測表に譲り、以下、器種ごとに述べる。

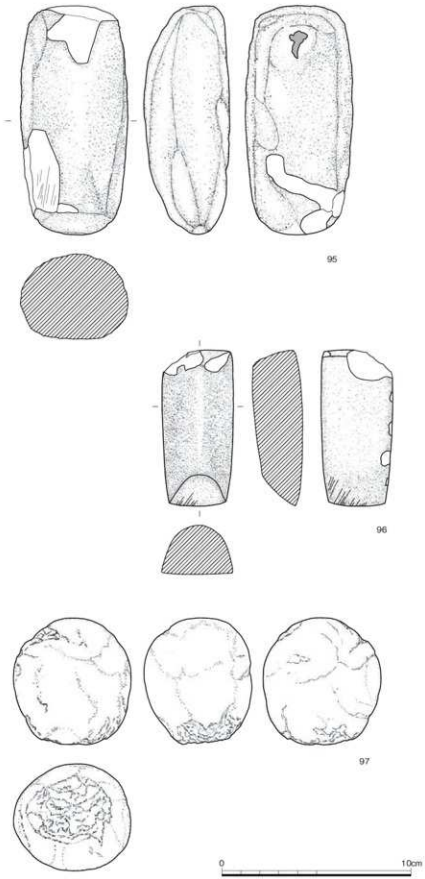
68～72は石鏃。うち71、72は有茎鏃である。68は平面五角形を呈した凹基鏃。両面から密に調整を施す。69、70は平面三角形を呈した平基鏃。70は先端から側縁に沿ってファッシット状の剥離が見られ、使用に伴う衝撃剥離と思われる。71は概ね縦長菱形の平面形で、左右非対称。72は明瞭な茎を持ち、ほぼ直角の返しと直線状の側縁を持つ。先端部を欠損する。器面一部に自然面が残存する。73は直線状の側縁を持ち、下部を折損する。74は石錐。先端部のみ残存する。側縁の稜上に僅かながら磨滅が見られ、使用に伴うローリング痕と考えられる。75・76は石小刀。75は両端を折損する。上下側縁から器形を作出した後、同じく上下側縁に鋸歯状の調整を施す。上側縁は欠損により詳細は不明だが、下側縁は片面からの調整で鋸歯縁を作出する。76は一側縁を直線に、他方を基部から先端にかけて緩やかに湾曲する刀子状の完形。片面に自然面を残し、素材剥片の剥離軸を石小刀の長軸とする。上下側縁から器形を作出した後、同じく上下側縁に鋸歯状の調整を施す。鋸歯縁は両面から作出しているが相互補完的に施しており、実質的には片面から作出することになる。75、76ともに鋸歯縁は概ね２mm間隔で非常に緻密なことから、鉄製工具を用いている可能性が考えられる。77は楔形石器。素材剥片を斜位に用い、先行する折損面を打面とする。打面には複数の敲打痕が見られ、その直下に階段状剥離が発達する。対向する辺はツブレており、両極打撃の痕跡が認められる。器面両面は両極打撃による剥離に切られた二次加工を求心状に施す。78、79は二次加工ある剥片。78は横長剥片の一側縁を背面側から散発的に二次加工を施す。79は背面に自然面が残存し、打点を折損する剥片を素材とする。一側縁に対し背面側から二次加工を施す。80から82は剥片。80は打面調整のある横長剥片。背面に自然面が残存し、端部は蝶番状。81は自然面打面の縦長剥片で打点付近からの縦割れで折損する。82は自然面打面で、一側縁にも自然面が残存する。83から88は石包丁。完形品は無く、刃部が残存するものはすべて直線片刃である。89は結晶片岩製剥片で、側縁は緩やかな凹凸を持つものの磨滅していることから、石鋸の可能性があるものとした。90、91は砥石。90は一面に断面U字状の明瞭な砥面が3条残存する。側面の一部は緩やかに内湾し、擦痕が見られる。91は両面、両側面に断面U字状の砥面が直交する。92から96は磨製石斧。92から94は蛤刃石斧であり、92は半折して基部が、93は刃部が残存する。94は中央やや刃部よりで折損する。93は残存する全面に精緻な擦痕がみられ、研磨単位が面となって明瞭である。92、94の基部には、擦痕を切る縦方向の剥離があり、石斧柄への装着および使用による破損剥離の可能性もある。また94基部付近には一部敲打痕が見られ、敲石等への転用も考えられる。95は顕著な擦痕は認められないものの、器形および刃部と思われる部位に擦痕が見られることから磨製石斧かその未成品とした。あるいは磨石の可能性もある。96は他の磨製石斧と一線を画する精緻な研磨を施す。断面は半月状で、半円面に片刃の刃部を作出する。形状は撥状で、基部には使用に伴うと思われる剥離が見られる。97は敲石。下面に敲打痕が顕著に見られ、それに伴いツブレが生じている。　（山内基樹）



第18図　石器・石製品実測図－２（1/2）



第19図　石器・石製品実測図－３（1/2）



第20図　石器・石製品実測図－４（1/2）

付表－１　石器計測表

遺構名	遺物番号	遺物名	石材	重さ(g)
5トレンチ　SD03	68	石鏃	サヌカイト	0.6
4トレンチ　SD08	69	石鏃	サヌカイト	1.3
1トレンチ　掘下げ	70	石鏃	サヌカイト	1.9
1トレンチ　P3	71	有茎石鏃	サヌカイト	2.5
3トレンチ　SD01	72	有茎石鏃	サヌカイト	5.0
5トレンチ　SD04	73	石鏃	サヌカイト	2.0
3トレンチ　P6	74	石鏃	サヌカイト	0.8
2トレンチ　黒色土	75	石小刀	サヌカイト	2.5
2トレンチ　暗褐色土	76	石小刀	サヌカイト	22.5
5トレンチ　SD04	77	楔形石器	サヌカイト	21.0
4トレンチ　5区　壁面	78	R.F.	サヌカイト	12.9
2トレンチ　SH18	79	R.F.	サヌカイト	13.9
4トレンチ　SD08	80	剥片	サヌカイト	18.0
3トレンチ　暗褐色土	81	剥片	サヌカイト	3.7
2トレンチ　SD15	82	剥片	サヌカイト	10.4
5トレンチ　SD04	83	石錐	結晶片岩	25.8
5トレンチ　SD04	84	石錐	結晶片岩	6.8
5トレンチ　SD04	85	石錐	結晶片岩	5.3
5トレンチ　SD03	86	石錐	結晶片岩	9.0
4トレンチ　SD08	87	石錐	結晶片岩	16.1
2トレンチ　黒色土	88	石錐	結晶片岩	10.5
5トレンチ　黒色土	89	石錐	結晶片岩	9.0
5トレンチ　SD04	90	砥石	砂岩	44.9
5トレンチ　SD04	91	砥石	砂岩	79.0
3トレンチ　SD14	92	磨製石斧	珪岩	299.0
4トレンチ　黒色土	93	磨製石斧	珪岩	200.0
4トレンチ　撹乱	94	磨製石斧	珪岩	618.0
3トレンチ　SD14	95	磨製石斧?	玻璃岩	535.0
5トレンチ　黒色土	96	磨製石斧	閃緑岩	138.0
5トレンチ　SD04	97	敲石	チャート	341.0

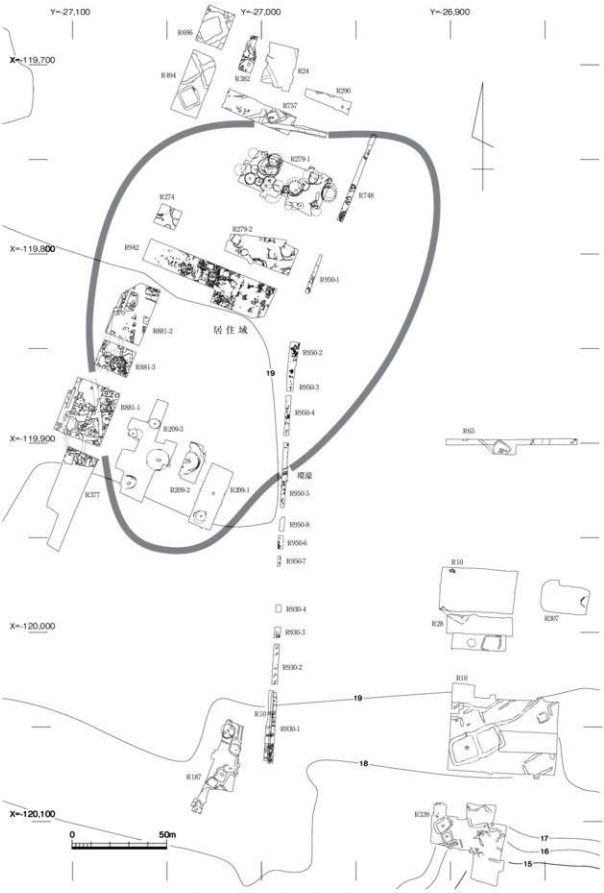
※二次加工ある剥片はR.F.とした

5　まとめ

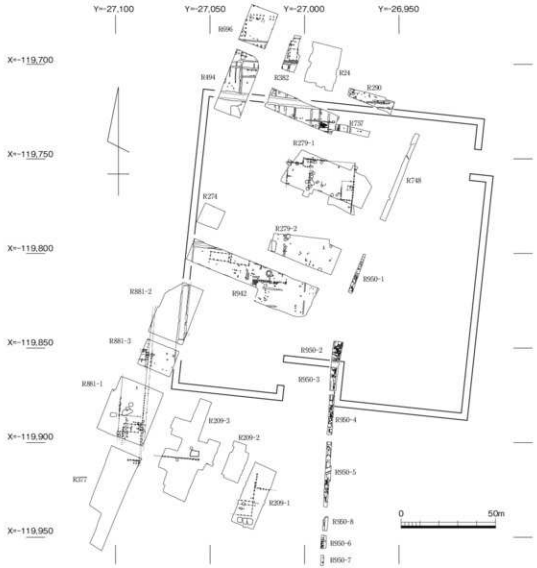
今回の調査は、昨年度の右京第930次調査と合わせて神足遺跡を南北に260m縦断する調査となった。両地点とも予想以上に工場等の撹乱を受けていたが、近世勝龍寺城の本丸の堀と弥生時代の環濠を新たに確認することができた。

江戸時代の遺構で注目されるのは、３トレンチと４トレンチで検出した東西の溝ＳＤ01と南北の溝ＳＤ14である。本地点一帯は、幕府の御書院番であった永井日向守直清が寛永十（1633）年から慶安２（1649）年の間に城館を築いたところであり、城の様子は『永井直清公御在所城州神足之図』に残されている。これまでの発掘調査で、外郭の堀や茶屋口の門の基礎、足軽町などの建物や井戸跡などが確認されており、絵図と遺構がほぼ一致することが明らかになっている。本丸については、北辺と西辺の堀、掘立柱建物や井戸、溝などが確認されている（第22図）。東西の溝ＳＤ01は、残存幅3.5mで断面は逆台形を呈しており、トレンチ東端で南へ折れる溝ＳＤ14は４トレンチの途中まで延びている。これを絵図と比べると、溝が折れた部分は本丸表口に設けられた内枡形の北東角に当たると判断される。溝ＳＤ14の南端は、撹乱で途切れることから不明であるが、撹乱が終わるところは地山面であることから、溝はこの間に終息して東へ折れるものと想定される。南辺の堀についてはまだ確認されていないが、右京第209次調査で堀は見つかっていないことから調査地の北側を通ると考えられる。新しい勝龍寺城として営まれた神足館は、江戸時代初期の館跡の構造がわかる事例として特筆される遺跡である。

弥生時代の神足遺跡は中期の拠点的集落であり、竪穴住居などの居住施設のまわりを環濠が巡り、その周囲を方形周溝墓が取り囲む集落構造が明らかにされている。５トレンチの溝ＳＤ03とＳＤ04は、居住域の南西部に位置する。すでに、右京第757次調査では居住域の北東部から環濠が確認されているが、今回のように複数の溝が確認されたのは初めてである。環濠内から出土した遺物は、いずれも溝上位の埋土に集中しており、遺物は多量で密に重なっている状況も共通す



第21図　弥生時代の遺構配置図（1/2000）



第22図　近世勝龍寺城の本丸周辺遺構配置図（1/2000）

る。今回の環濠から出土した土器は、弥生時代中期前半（Ⅱ様式～Ⅲ様式）を中心とするものであり、先の環濠に投棄された中期後半の土器と時期は異なるが、集落を巡る環濠の消長を考えるうえで注目される。今後の調査の進展と詳細な検討が待たれる。末筆ながら、磨製石器の石材鑑定は京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏に御教示を得た。　（原　秀樹）

注１）原　秀樹「右京第930次調査報告」『長岡京市センター報告書』第49集　2008年
２）久保哲正・山本輝雄「右京第10次・28次調査調査概要」『長岡京市報告書』第５冊　1980年
３）原　秀樹「右京第209次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和60年度　1987年
４）岩崎　誠「右京第881次調査略報」『長岡京市センター年報』平成18年度　2006年
５）『長岡京跡右京第942次調査現地説明会資料』2008年
６）岩崎　誠「右京第279次調査報告」『長岡京市センター報告書』第４集　1989年
７）中島皆夫「右京第494次調査概報」『長岡京市センター年報』平成７年度　1997年
８）原　秀樹「右京第757次調査略報」『長岡京市センター年報』平成14年度　2004年
９）山本輝雄「右京第748次調査報告」『長岡京市センター報告書』第31集　2003年

付表－２　報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうあとうきょうだい950じはっくつちょうさほうこく
書名	長岡京跡右京第950次発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第５０集
編著者名	原　秀樹
編集機関	財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10－１

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡 神足遺跡 近世勝龍寺城跡	長岡京市東神足 ２丁目地内	26209	107 83 84-2	35°59′58″	135°59′58″	20090818 ～ 20091114	329㎡	道路拡幅 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡	都城	長岡京期		土師器 須恵器	
神足遺跡	集落	弥生時代	環濠　竪穴住居 柱穴　土坑	弥生土器 石器	神足遺跡の環濠
		飛鳥時代		須恵器	
近世勝龍寺城跡	城館	江戸時代	堀　柱穴	瓦	近世勝龍寺城 本丸の堀

※緯度、経度の測点は調査区の中心で、国土座標値は旧国土座標系を使用した。

図　　版

1 トレンチ全景（南から）

図版二

2トレンチ全景（北から）

2トレンチ拡張後（北から）

3トレンチ全景（南から）

3トレンチの堀ＳＤ14（南から）

図版六

（1）本丸の堀（北西から）

（2）本丸の堀断面（西から）

4トレンチ全景（北から）

図版八

5トレンチ全景（南から）

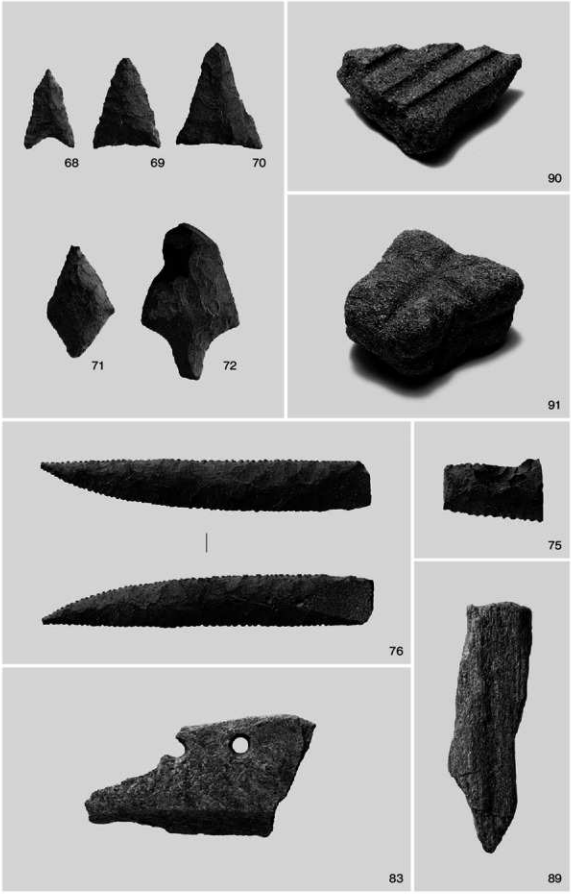
（1）環濠ＳＤ03・ＳＤ04（南から）

（2）環濠の断面（西から）

（1）6トレンチ全景（北から）

（2）7トレンチ全景（南から）

（3）8トレンチ全景（南から）



石器・石製品

長岡京跡右京第950次調査

石器・石製品

弥生土器・須恵器

長岡京市埋蔵文化財調査報告書　第50集
長岡京跡右京第950次発掘調査報告

平成21（2009）年３月16日　印刷
平成21（2009）年３月18日　発行

編集発行　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の１
電話　075－955－3622　FAX　075－951－0427

印　　刷　山代印刷株式会社
〒602－0062　京都市上京区寺之内通小川西入
電話　075－441－8177　FAX　075－441－8179